東京美術選書 69

漢詩入門

はじめ/の/はじめ

安藤 信広著

東京美術

●東京美術選書——69

漢詩入門・はじめのはじめ

安藤　信広

≪著者略歴≫

安藤信広（あんどう・のぶひろ）
1949年東京都に生まれる。東京教育大学文学部卒。同大学大学院修士課程修了。東京学芸大学附属高校を経て，現在法政大学教授。著書に『漢文学』（法政大学通信教育部）、『漢文を読む本』（三省堂）、『日本文学小事典』（平凡社・共著）、『中国の文学論』（汲古書院・共著）などがある。
現住所　東京都小金井市本町4-1-1-702

検印省略

漢詩入門はじめのはじめ

東京美術選書　69

一九八九年三月一日　初版第一刷発行

定価／1、200円

著者　安藤信広

1989 © Nobuhiro Andō

発行者　佐々藤雄
発行所　東京美術
〒101 東京都千代田区神田司町2－7
電話　03（292）3231

印刷／東京美術制作センター
製本／関川製本所

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

ISBN4-8087-0526-5 C0398 ¥1200E

漢詩入門はじめのはじめ／目　次

はじめに――1
第一章　詩とのであい―旅だち――11
1　見ることから――12
詩とのであい　友情の色　見ること
踏歌のその後
2　見ることのさまざま――22
わかりやすい言葉　視点の動き
古代のまなざし
第二章　季節の詩―漢詩のきまり(一)――37
1　春――38
花ひらくとき　五言絶句　訓読
音節と韻　梨の花　七言絶句

2 夏――56
夏の感性　奔放な時間
3 秋――62
秋のおとずれ　忠度のこと　運命にのぞんで　菊の花　古体詩　雁とともに
4 冬――83
冬であればこそ　新しい生命　律詩
第三章 生きるということ―漢詩のきまり(二)――89
1 幼い命――90
幼い命とのかたらい　つきはなすこと
日脚 平地に下る　言葉と現実
表現するまなざし　子を叱る
2 友情――110
新月の色　問いと答　平仄のきまり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

オリオンとアンタレス
3 男女の愛—詩と歌謡——129
恋愛の詩　歌曲のうつろい　錯、錯、錯
夜の雨　七言絶句の平仄　許されない愛
4 死をめぐって——145
挽歌　自らのための挽歌　死への姿勢
大津皇子のこと
第四章 社会・個人・自然——161
1 社会と政治——162
表現のすなおさ　表現のたしかさ
知識人の社会批判詩
2 思索を通して——179
内面に向かって　繁華の中に　心の表現
倫理と詩　天地の一沙鷗

3 自然――198
菜の花と蝶　時にはウィットで
自然詠にこだわる　自然と人間
第五章　羈旅の歌――鑑賞と詩作への手がかり――209
1 旅と文学――210
百代の過客　古代の旅　羈旅する詩人
自分をみつめる　五感のすべてを
2 心豊かに――219
訳詩のこころみ　まず写生から　心豊かに
付録――226
I 詩形の分類　II 韻目表　III 平仄式
おわりに――230

はじめに

もう「漢詩」と聞いただけで、耳をふさぎたくなるという人がいます。そうまでしなくとも、とにかくむずかしいと思っている人は、ずいぶん多いようです。

そんなことはない、漢詩はむずかしくないのですが、それを息せききって説明しても、うたがいはきっと晴れないでしょう。それよりもまず、実際に漢詩を一つだけ見てください。題名は「綢繆」（しっかりと）といいます。

綢繆

綢繆束薪
三星在天
今夕何夕
見此良人
子兮子兮

綢繆

綢繆と　薪を束ぬれば
三星　天に在り
今夕は　何の夕べぞ
此の良人を見る
子よ　子よ

如此良人何　此の良人を如何にせん

しっかりと薪をしばっていると、
オリオンが夕空にのぼる。
こよいは何という夜だろう、
この美しい人を見ていられるのだから。
あなたよ、あなたよ、
この美しい人を、どうしたらよいだろう。

ぐるぐると、しっかりと薪をしばる、それは農民のしごとです。門さきでしっかりと薪をしばっていると、若い農夫はふと、夕空にいつのまにかのぼっていた、オリオン座の三星に気づきました。呆然として、しばらくみとれていたかもしれません。今夜は、何というう るわしい夜なのだろう――若者は思わずつぶやきました。こんなにも美しい人を見ているのだから。若者のとなりには、新妻がいたようです。

「あなたよ」と、妻にむかってよびかけながら、「この美しい人」と、妻のことをいいかえました。「あなたよ」とよびかけて妻の瞳をみつめたら、妻があまりにも美しいので、語りか

けることばを失ってしまったのでしょう。そして、その当人を前にして、「こんなに美しく良い人をどうしたらいいのだろう」と、とまどいとともに、言葉が口をついたのでしょう。

これは、紀元前八世紀ごろの詩です。紀元前六世紀にできたと思われる詩集『詩経』のなかにおさめられています。『詩経』におさめられている三〇五篇の詩はたくさんの民謡をふくんでいて、それらは長い年月、口から口へと歌いつがれてきたものでした。ですから、『詩経』の詩篇の一つ一つがいつできたのか、はっきりとは分かりません。『詩経』がまとめられた紀元前六世紀より、一〇〇年前、二〇〇年前とふんでいって、まあ紀元前八世紀か七世紀の作品かなと考えているわけです。

そんなにも古い詩です。古い詩ですが、私にはあたらしいものに感じられます。この詩と私とのあいだに、三〇〇〇年にちかい時間がよこたわっているとは思えません。

詩とは、そのようなものでしょう。日ごろつかっている言葉と、どこもちがってはいない。それなのに、三〇〇〇年ちかくの時をこえても古びることなく、人の心にあたらしい波紋をよびおこす。それが詩の言葉でしょう。そして、漢詩の言葉です。

でも、首をかしげる人がいるかもしれません。「日ごろつかっている言葉と、どこもちがってはいない」と私はいいましたけれど、漢詩も和歌も現代詩も、みんな、毎日のはなしことばとはちがっているように見えるからです。

それは、こういうことです。詩というのは、絵筆(えふで)も絵の具もいらない、彫刻刀も粘土もいらない、楽符もピアノもヴァイオリンもいらない、誰もが毎日つかっている言葉がありさえすればよい、ということ。そして、その言葉は、物理学の言葉や分子生物学の言葉のような専門的な知識・特別なやくそくごとを、必要としていない、ということ。その二つです。

一生のあいだ絵筆をもたないという人は、いるかもしれません。けれど、一生言葉をもたないという人はいません。それを音声にして出すのに障害をもつ人も、心のなかにゆたかな言葉をもっています。ですから、人は生まれながらにして、誰もが詩人になる素質をそなえているのです。まして、詩を受けとめ楽しむ力は、誰でもがもっています。

私がこの本で、自分で考えながらみなさんにお話ししようと思うのは、漢詩を人間の詩として楽しみたいということです。

なるほど、漢詩には見なれない言葉も、むずかしそうな字も、ところどころに出てきます。けれどそれは、読む人の言葉の世界をゆたかにしてくれるものと考えて、よいのではないでしょうか。私たちが、昨日も今日もはなしている言葉、そして明日もはなすにちがいない言葉がまったくこのままだとしたら、すこし貧しいように思います。漢詩のむずかしそうな言葉でも、人間の言葉として、おなじアジアに生きるものの言葉として、またふるくから日本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

語のなかに根をおろして生きてきた言葉として、やっぱり私たちの心のなかに息づいています。それをたいせつにしようとしさえすれば、『万葉集』を読むように、現代詩を読むように、プーシキンやヴェルレーヌを読むように、漢詩を読むことができるでしょう。

すくなくとも、漢詩を読むのは、わが国の古歌を読むのよりは、むずかしくないと思います。

はねかづら　今する妹を　うら若み　いざ率川の　音のさやけさ　（『万葉集』巻七）

はねかづらを髪につけそめたあなたがあんまり若いから、「いざ」（さあ、おいで）と声をかけたくなる、その「率」川の水音のさやけさよ。

奈良をおとずれれば誰もが立ちよる猿沢の池の、すぐ南をながれる率川の歌です。はてそんな川があっただろうか、と言わないでください。小さな溝を一またぎにしているつもりでも、それは万葉の昔から歌にうたわれた清流なのです。ほほえましいこの歌。けれども「はねかづら」が何なのか、まず分かりづらいでしょう。年ごろになった娘が髪をあげそめるとき、菖蒲の葉などでつくった髪かざりをつける、それが「はねかづら」です。「妹をうら若み」

というのも、現代語にはない語法で、あなたがうら若いので、ということ。そして、「いざ」までが「率川」をうたいおこすための〈序詞〉だということも、知っていなくてはなりません。

でも、なんという美しい歌でしょう。水音のさやけさを、こんなにも美しく、私たちの祖先は言葉で表現できる人々でした。そしてその美しい言葉の力を、古典についてほんのすこし学べば、私たちは私たちの胸の中で命あるものにできるのです。

ふりかえって漢詩を見れば、たとえば「綢繆」ということばをしらべるのは「はねかづら」をしらべるより簡単ですし、「如此良人何」（此の良人を如何にせん）という語法は、「妹をうら若み」という語法よりおぼえやすいでしょう。ほかにむずかしいところはありません。序詞という技巧がないだけ、漢詩の方が分かりやすかったのではないでしょうか。

漢詩と和歌の優劣論をしようというのではありません。漢詩も、和歌も、現代詩も、人間の詩という共通の広場で楽しく読みたいと思うのです。率川のむこうの恋人に「いざ」（さあ）と手をさしのべる若者と、オリオンから目をうつしたそのとき妻の美しさに呆然としてしまう青年と、どこにちがいがあるでしょう。

もちろん、漢詩はもともと中国の詩です。だから、漢詩を読むことによって、中国の人々の考えかたや感じかたの特徴が分かってきます。民族のちがい、文化のちがいをきちんと見

きわめることは、今の日本人にとってたいせつなことだと思います。それでもなお、ちがいの奥底に生きているアジア人としてのつながり、さらに人間としてのつながりを、私は掘りあてたいのです。

大きすぎるのぞみを、はやばやと言いすぎたかもしれません。「綢繆」（しっかりと）の詩ののこりを、紹介しておきましょう。この詩は、三つの章からできていて、さきほど引いたのはその第一章だけでしたから。第二章を妻の歌、第三章はまた夫の歌として読んでみましょう。

綢繆束芻　　綢繆と芻を束ぬれば
三星在隅　　三星　隅に在り
今夕何夕　　今夕は何の夕べぞ
見此邂逅　　此の邂逅を見る
子兮子兮　　子よ　子よ
如此邂逅何　　此の邂逅を如何にせん

綢繆束楚　　綢繆と楚を束ぬれば

三星在戸　　三星 戸に在り
今夕何夕　　今夕は何の夕べぞ
見此粲者　　此の粲者を見る
子兮子兮　　子よ　子よ
如此粲者何　　此の粲者を如何にせん

しっかりと芻をしばっていましたら、
オリオンがずいぶん高くのぼりました。
こよいは何という夜でしょう、
このような出あいができましたから。
あなたよ、あなたよ、
この出あいを、どうしたらよいのでしょう。

しっかりと楚をしばっていると、
オリオンが南の空にのぼりきった。
こよいは何という夜だろう、

この光りかがやく人を見ていられるから。
あなたよ、あなたよ、
このかがやく人を、どうしたらよいのだろう。

おおよそ、南宋の哲学者朱熹（一一三〇―一二〇〇）の説にそって訳してみました。でも、あくまでも私の試訳です。一章と三章を夫の歌とし、二章を妻の歌としたのは、朱熹の考えかたとちがっています。この後も、ことさらにいろいろな学説は紹介せず、私の試訳で通したいと思います。

とにかく「綢繆」（しっかりと）の詩が、無名の農夫と妻とのあいだにかわされた歌だということは、分かっていただけたでしょう。結婚の形式は、現代とはちがっていたかもしれません。二章で妻が、それを「邂逅」（出あい）とよんでいることからも、うかがわれます。でも、そういうちがいをこえて、愛する者の思いをうたうこのバラッド（物語り風の民謡。ballad英。ballade仏）は、今でも私たちの胸にせまるように思います。

漢詩のおもしろさはどこにあるか、それは現代の私たちに何を開くか。これから考えたいのは、そういうことです。ですからこの本は、漢詩を読む人のための入口です。けれど、漢

詩をつくってみようとする人のためにも、なにがしかの参考になるでしょう。そうであるよう、望んでいます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c